HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	報告に対するコメント
Author(s)	坂元, 忠芳
Description	特集II　シンポジウム
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 103, 207-213
Issue Date	2007-12-29
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.103.207
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30345
Type	departmental bulletin paper
File Information	103_207-213.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究院
紀要　第103号　2007年12月

報告に対するコメント

坂　元　忠　芳*

Comment for the Report

Tadayoshi SAKAMOTO

それではほんとうに三十分間で、ちゃんとしたコメントができるかどうか、非常に心もとないのですが、報告します。その意味では、私は、文字通り「危機」に直面しているという気がしています。

私は二つの論考を用意しました。けれどもそれを、これからのコメントで繰り返すのではなくて、今まで五人の方がたからお聞きした「若者移行」の「流動的な事態」に対処するという意味で、これからコメントするわけですが、ひじょうに不安な状態にいます。その意味では、現代の若者たちの不安定な状態が、老人の私にもよく分かるような気がしています。それは、あとでも触れますが、現代における「ケアの必要性」ということと、まさに関係しています。

私は今回、都立大学の大学院で学んでいて、「ニート問題」をケアの側面から研究している宮島基君と一緒に北海道に来ましたが、今回のコメントでは、彼がいろいろと私を援助してくれたのです。

皆さんにお配りしました論考は、まだあらっぽい不充分な覚書きにすぎませんが、宮島君の援助がなければとてもこの１カ月では書けませんでした。そこで、宮島君を簡単にご紹介しますと、乾彰夫教授のゼミにずっと参加していて、ノディングズのケアリングの問題をずっと研究しています。今回も、どうしてもケアの観点から、「若者移行」の問題を考えたいという興味・関心から、この会に参加してくれました。前置きはそのぐらいにして、早速本題に入ります。

一口に言って、三つの問題があるように私は思います。

「ニート問題」あるいは「若者援助」を、非常にひろく広義にとらえた場合、三つの問題があるのではないか。これで尽くせるかどうか分かりませんが、そしてこれまでずっと報告していただいた五人の方々の問題を、これで全部包含できるというふうにも思いませんが、私の考えでは、おおきく言って、三つぐらいの問題があるように思います。

一つは、「若者世界」をとらえる場合、先ほどからも何度も出ましたが、「ポスト近代」をどうとらえるかということです。私は、そうした状況のなかで、新しい質の「物象化」の問題が出てきているのではないかと思っています。

それから二番目に、そういうなかで、先ほどからもたびたび出ていますが、現代ヨーロッ

* 東京都立大学名誉教授

パにおける「若者移行」の取り組み――これは後で説明しますが、「ヨーヨー型」、「ヨーヨーモデル」と言われているものですが――に比べて、日本の「若者移行」におけるさまざまな援助を、はたして「日本型」と言っていいかということです。つまり、日本の「若者移行」の特性は何であるかという問題です。ヨーロッパと比較して、それを「日本型」ともし名付けることができるとすれば、それはいったいどういうことであるかという問題です。その中で、白井さんからも出された、新しい「ヤング・アダルト」の展望を、現代の日本においてどうとらえたらいいかという問題があろうと思います。

三番目は、私がこれまで言ってきた「危機の教育学」 ―― pedagogie en criseとか、pedagogy in crisisという考え方――でいくと、果たして「リスク」という問題、あるいは「リスク社会」といわれる現代社会の問題は、「若者移行」の問題をとおして、どのように展望したらよいかということです。つまり、教育学の新しい地平を切り開いていく意味で、「リスクrisk」や「クライシスcrisis」を、根底からどうとらえたらいいかという根底的な問題です。これは、ことばを換えて言いますと、現代社会における生活の「切断」と「連続」の問題と言ってもよい問題ですが、先ほどからのご報告でも、「若者移行」における「切断」の問題がたくさん出されましたが、つまりは、現代社会における「切断」と「連続」の問題として、「若者移行」をどうとらえるかということです。

さて、第一の問題ですが、それは、現代社会において、「新しい危機」あるいは「新しい物象化」がでてきているのではないかという問題です。私が用意した論考――「ニート問題と若者支援行動」（第１論文）、および「若者の日本的性格」（第２論文）――で言いますと、第１論文の「液状的物象化」と言ったところです。ここで書いていることは、要するに、近代産業社会、「フォーディズム」といわれるようなもの――労働をきちっと分割して、そしてそれの連結によって、ある全体的な労働管理をやっていくという「テーラー主義」にも象徴されるような、そのような生活の「物象化」の問題です。おそらくルカーチは、そういう視点で「物象化」をとらえたと思うのです。つまりひと言で言うと、「労働の時間を空間化する」、「機械的に空間化する」、ということです。

それに対して、最近、ポーランド生まれのイギリスの社会学者であるジグムント・バウマンが登場しますが、彼は、ルカーチにたいしてまったく別の状況を述べているのです。彼のことばを紹介しておきましょう。バウマンは、ニート問題でよく引用される学者です。また、「危機社会」論を言っているドイツのウーリッヒ・ベックなども、バウマンに非常につながっており、あるいは、平塚さんがよく引用されるアンソニー・ギディンズも――ギディンズはちょっと左派というふうに言えるかどうか分かりませんが――彼と関係があります。そのバウマンがつぎのように言っているのです。

バウマンは、現代社会を「リキッド・ソサエティliquid society」と言っています。つまり、現代社会においては、労働そのものが「液状的に流動化している」のではないか、と言うのです。

それにちなんで、後でもう一度触れますが、今、ここに持ってきたのは『搾取される若者たち―バイク便ライダーは見た！』（集英社新書）という非常にショッキングな報告です。これは、都内のいわゆるフリーターと言われる「バイク便」を扱った書物です。著者は、阿部真大という若い社会学者で、実際、彼自身が、「バイク便」を経験しながら、その参与観

察をやっているのです。

例えば、東京に「昭和通り」という新橋から銀座まで行く広い道路があります。歌舞伎座の横を通る幅十メートル以上の道路ですが、雨の日など、この道路を、夕方、バーッとバイク便で走っていくと非常に気持ちがいい。けれども、本人はたいへんくたびれてくる。しかも、感情はどんどんハイになる。くたびれてきているにもかかわらず、くたびれたと感じられないで、どんどん走っていく。すると、ほとんど「死の水門」をくぐる、というような状態になるわけです。言ってみれば、ものすごく人が混雑している道路をダーッと走っていく「バイク便労働」を若者がやっている。そうした労働を、著者は、まさに「液状的だ」と言い、バウマンを最初に引用して、現代の労働は、非常にフレキシブルな形態になっていて、「バイク便」を、そのような労働のもっとも典型的なものとして、象徴できるのではないかと言っているのです。

そこで、私はつぎのように考えたのです。

現代の若者は、とにかく、就職できない、あるいは就職しても、非常にあいまいな状態の中で、次々と危機を自分の中に迎えなければならない。こういう若者の世界を、「リキッド・ソサエティ」における「リキッド・レイフィケーション（liquid reification）」、つまり「液状的物象化」と言ってはいけないだろうかと。

ここで、reifyというのは、人間やごく抽象的なコンセプトを、物に転換するという意味です。「事柄」や「概念」が「物」になってしまう。ところが、このreifyは、それをもう一回もとに戻すということを前提として言われるのです。それを「脱物象化」すると言います。英語ではdereify,dereificationです。ところで、「脱物象化」するというのは、「物」に転換されたものを、単純に元の人間やコンセプトに戻すという意味ではなくて、「物象化」されたものを「再構成」することです。「物象化」するということが「危機」のもとで行われるなら、「脱物象化」するということは、「危機」そのものを「再構成」して、安全へと至らしめるという意味にもなります。

そこで、現代の危機をめぐって、「物象化」と「脱物象化」という概念を、具体的に展開したらどういうことになるだろうかということを、まず考えます。そうすると、例えば、情動労働や感情労働がどんどん増えていく現代の状況の中で、感情とか情動とかを、どうとらえるかということが大きな問題になってくると思います。「若者移行」のなかで、労働が問題になっているわけですが、そこでは、情動労働はどうなっているだろうか、という問題です。

さきほど宮崎さんが言われたように、現代の生活のなかでは、情動が抑圧されるということが、確かにあるのですが、そして、その中で、安宅さんも言われたように、若者が、職場の周辺に、一種の「擬似家族的関係」をつくっていき、自分の家族観をある距離感をもって再構成し、ある種の共同体をつくっていくということが確かにあって、それは、その通りだと思います。しかし、感情労働がどんどん非正規雇用化していく中で、今、言いました「バイク便」のようなものが出てきているときに、こういう状態をもう一度、「脱物象化」すると言えば、そこで、どういうことがあり得るのか。そういう問題が出てきているように思います。

その場合、さきほど、横井さんも言及されたように、果たして「フォーディズム型サイクル」を再生することでいいのかどうか、ということがありましょう。これは非常に大きい難しい問題でして、バウマンは、「フォーディズム」ではもうやっていけなくなっていると言って

いますが、本当に「液状化した社会」のなかで、「液状化したもの」に対する新しい生活の再構成を、どうするべきかということが、現場の実践家にとっても、非常に重要になっていると思います。

例えば、「引きこもり」をどうとらえるかという点で考えますと、若者だけではなくて、子どもにとっても、「引きこもり」が増えてきているときに、平塚さんがさきほども触れられましたが、最近、本田由紀さんが『多元化する「能力」と日本社会』（大佛次郎論壇賞受賞）のなかで、「ハイパー・メリットクラシー」ということを言われていますが、これをどうとらえるかということがありましょう。つまり「超メリットクラシー」とか「過剰メリットクラシー」とかと言うべきものが、子どもをとらえている。学力だけではなくて、子どもの内面の感情をもとらえている、子どもの努力をとらえ、子どもの心構えをもとらえている――そういう「ハイパーメリットクラシー」に見舞われている若者の不安や恐怖を、どう再構成するかというたいへん大きな問題があるのではないかということです。

さて、二番目の「ヨーヨー型」の問題ですが、これはつぎのようなことです。

さきほど、白井さんがアメリカにおけるヤング・アダルトの新しい動向について言われましたが、「ヨーヨー型」については、その研究がインターネットのサイトに出ていますので、今そのいくつかをプリント・アウトしたものをお配りしますが、こういう「若者支援」の方策が、現代ヨーロッパで行われていて、我が国でも、乾さんをはじめ、多くの研究者がこれを紹介しています。

ここで、「ヨーヨー型」というものについて、初めて聞かれた方のために説明しておきますと、これまで、若者期というのは、18歳からはじまって、だいたい25歳くらいまでで終わるとされていました。つまり、若者は25歳頃に結婚して家庭をつくり、子どもを生んで成人になるという標準的な道が存在していた。これを、たとえば太い一本の矢印で表すとすると、昔のヤング・アダルトは、そのようなモデルで表現できたわけです。ところが、この一本の矢印が、やがて、何本かの細い矢印に変わっていった。それから、矢印のはじまりも終わりも少しづつずれて、複数のモデルができて来たわけです。成人になるのも、25歳頃とは決まらずに、もっと年齢が上がる場合もでてきた。ところが、グローバリゼーションが進み、ネオリベラリズムがはじまって、今日に至ると、この矢印がもっと多様化して、その幅もいっそう細くなり、その方向も上を向いたり下を向いたりするようになり、一人の若者が、若者期をヨーヨーのように行ったり来たりするようになった。それを図で示すと、キャリアがヨーヨーのように前後・上下に揺れる形になる。下限の年齢は18歳ですが、上限の年齢は何歳にでもなる。３５歳どころか、極端に言えば、死ぬまで若者期が続くかも知れない。老人になるまで若者期であるかもしれない。

そうしますと、もうヤング・アダルトの概念――つまり、大人になるという概念――そのものが、「液状的物象化」の中では、どんどん変わっていっているのではないか。それをどうコントロールするかという問題がおこっているわけです。

さて、こうした「ヨーヨー型」研究にフランスが参加していないのがちょっと気になるところですが、それはともかくとして、この「ヨーヨー型」にも、つぎのようないくつかの型があると言われています。

１）スカンジナビア型、２）西ドイツを含めた中央ヨーロッパ型、それから、３）地中海型、

4）グレート・ブリテン型――こういうタイプが言われているのですが、しかし共通して言えることは、現代ヨーロッパを通じて、これらをすべて、「福祉的な体制welfare regime」を支柱として作りあげていこうとする傾向が色濃くあるということです。

このタイプ全体をつうじて、もっとも重要なことは、「ベーシック・インカムbasic income」、すなわち「基礎的な収入」を、それも「無条件unconditionalに」、保証することです。このことをさきのバウマンが強調しているのですが、「ヨーヨー型」の研究でも、この原則が据えられています。この点については、さきほども、横井さんがゴルツGorzを例にして言われたとおりです。私の言い方で言いますと、このような最低の条件がない場合には、「物象化」された生活を「脱物象化」することなどとてもできないと言うことです。

それからやはり、「参加participation」と「シチズンシップcitizenship市民的権利」ということが重要視されます。つまり先ほどもどなたかが言われたように、若者を「権利の主体」としてとらえることがひじょうに大切であって、その意味で、「ヨーヨー型」では、「エージェントagent」とか「エージェンシーagency」とかが、ひじょうに重要であると言われています。つまり、「若者移行」において、若者を「能動的主体」にする必要があり、そして、そのような主体を担うシステム――「エージェンシー」――をもういちど発見する必要があるというのです。バウマンのことばを借りて言いますと、それはまた「政治の発見」でもあるのだと言うのです。

新自由主義的政策のなかで、かって、サッチャーが「我々には、社会などなくなってしまうのだ」と言いましたが、バウマンは、あの有名な宣言にたいして、はっきりと対抗して、若者を「エイジェント」にするべきだと言うのです。

もちろん、そこから、さきほど平塚さんも言われたように、「アクション・ポテンスaction potence」とか、「コンピテンシーcompitensy」とか、ということがひじょうに大事になってきましょう。そこで、もうひとつ重要なのは、いわゆる「ポスト・モダニティー」の社会において自立していく場合の、「エイジェントagent」と「クライエントclient」との関係です。つまり、若者を「主体的行為者」にするだけではなくて、ケアの対象にもする場合があるということです。つまり、若者を「クライエント」として扱う必要があると言うのです。

ですから、若者を「権利の主体」というだけでよいのかということが問題になってきましょう。もうすこし、「ケアされる人間」、「ケアされる人」としての若者という問題が出てくるのではないか。討論で問題にして頂きたいのですが、たとえば、「引きこもり」の若者にたいしては、本田由紀さんたちも言われるように（『ニートって言うな』光文社新書）、「引きこもり」の若者だけが、ニートではないことはたしかです。ニートのなかで、「引きこもり」のような「病理型」は非常に少数だけれども、しかし、それだけでは問題は解決しない。「引きこもり」型の問題が、日本ではほとんど「ニート問題」とイコールにされているのではないか、という本田さんたちの批判はよく分かります。しかし、ほんとうに「若者支援」のなかで新しいシステムをつくっていく場合に、「クライエント」の問題を考えて行く必要がある。

その場合、やはり、「若者移行」における「日本型」の問題を、はっきりさせなければならないと思います。そのことについて言いますと、第二論文でも書きましたが、いま、団塊世代ジュニアである30代の社会学者が、面白い論文を書き始めています。彼らは、小さいときから、学校でずっと競争させられ、自分たちは、同世代ではエリートとなったけれども、そのエリートが、ニートとかフリーターのなかに混じって、そうした労働に従事しながら、自

分たちの世代の問題点をもう一回洗い出そうとしています。そして、そのためにも、まず、生々しいドキュメントを書こうとしているのです。

そのドキュメントの一つが、小樽市のノンエリートを調査して描いたテキストです。

これは北大大学院の小西二郎さんが調査されたもので、ひじょうに興味深いものです。たとえば、ガソリンスタンドに勤めている 28 歳の若者は、昔の友達たちと一緒になって、自分の生活上の不安をはじめいろいろなことを、みんなで話し合っています。そうして、ある「疑似家族的な集団」をつくっているのですが、けれども、こういう集団が、どうしても、プライベートな性格を抜けでないという問題があるのです。

さきの「バイク便」の場合でも、公的空間そのものが危険に陥っているのですが、こうした問題は、私的な空間をなんとかしようとしても、どうしようもない状態ではないか。このことについては、乾さんも言っていますが、それは、日本の「若者支援」が、やはり、「private resourceプライヴェート・リソース：私的資源」にだけもっぱら依拠していて、なかなか、公的空間に行くことができていないことを示しています。バウマンの言い方を借りますと、「政治の発見」へといけない問題があるということです。

もうひとつ、携帯電話を組み立てている多摩の工場のフリーターの場合は、明治大学の院生の戸室健作さんが参与観察した記録ですが、ここで働いている若者たちは、趣味的な集団をつくって、登山に行ったり、バスケットをやったりしながら、たいへん不安定な自分たちの生活を支えようとしています。しかし、やっぱりその空間はプライヴェートなものです。

日本では、このように、公的空間に行けない問題があって、これをどうするかということがあるのではないか。バイク便の場合などは、これまでの日本型の「若者支援」では、もうやっていけないのではないか。そういうことです。

もう時間が来てしまいましたので、第三番目に、結論めいたことを申しますと、結局、「リスク」というものについての私たちの感覚は、まだひじょうに古いのではないかということです。この点で、バウマンは、「リスクrisk」と「デインジャーdanger」とは、どちらも「危険」を意味しているようだが、この二つをはっきりと区別すべきだと言っています。つまり、現代では、「危険」は、「デインジャー」ではなくて、日常的におこっている「リスク」なのであると。

このコメントの最初に、私自身が「危機」に直面していると言いましたが、これは、私が「リスク」をいつも感じているという意味です。そう言う意味では、やはり、若い学生や院生諸君のなかにある「リスク感覚」というものをひじょうに大事にする必要があると思います。そして、「クライシス（危機）」や「リスク（危険）」が、日本人の場合には、まだ、感覚として、ひじょうに「デインジャラス」なものとしてしかとらえられていないのではないか。けれども、バウマンはそうではないと言っているのです。

最初に申しましたように、現代の「液状化した物象化」を日常普段に「脱物象化」するようなシステムと人格とを、自分たちの周りに作りあげることでしか、この「ポストキャピタリズム」とか「ポストモダニズム」とかといわれている状態を乗り越えることはできないのではないか。おそらく、それはかって「テーラー主義」のもとで、全国を電化して、人民の記帳を実現し、社会主義をつくりあげようとしたレーニンが構想したようなものは、ほとんどありえないということではないか。それでは、この「脱物象化」された未来の社会状態は、

いったいどういうものなのか。そういう問題を考えざるをえない。

私は、さいしょに、「危機の教育学pedagogie en crise」の観点から、「ニート問題」を見ていく必要があると申しましたが、この発想に立ちますと、生活におけるさまざまな「切断」が不断に起こっているときに、それを日常的に「持続」していくのはどういうことであるか、ということを考えます。こうしたことを、具体的な場面で、徹底的に考えていくと、ある意味で、本当に「脱イデオロギー的なもの」に到達するのではないか。その意味では、みんなが、こうしたドキュメントを出し合う時代に入ったのではないか。そのように思っているわけです。

たとえば、さきほど自立塾について、安宅さんが言われましたが、あの小さな一軒家のことです。で、あの一軒家は、はたして「公的空間」かどうかということです。それはまだ「私的空間」に止まっているのではないか。いま、政府は、若者自立塾などを、いろいろな形で支援しているように見えます、そして、私たちは、そのことにたいして、さまざまな積極面を見出したいと思っています。けれども、さきほど、安宅さんも言われたように、それはそれほど単純に行くことではない。安宅さんは、だいいち、そのような自立塾へ行く若者の層が、まずは決められているのではないかと言われました。そのことは、あそこで作られている空間そのものが、いったいどういうものであるか、ということを示しています。かんたんに、三ヶ月ぐらいの合宿で、ほんとうに若者が自立できるのかどうか。私などは、それほど簡単ではないと思います。私は参加した経験がないので、いちど経験したいとも思います。老人の私なども一度参加すれば、そのことがよく実感できると思うのですが、そのような空間がほんとうに安心した空間になっているかどうか。日本的私的空間を越えて、新しい公的空間をどうして作りあげていくというか――そういう問題として、私は、生活の「連続性」や「切断」の問題をとらえ直したいと思っているのです。

その意味で、今日、五人の方がたが報告されたことは、それぞれすべて当然のことで、私のコメントはそれに反対する理由はほとんどないのです。むしろ、「クリティカル・シンキングcritical thinking」ということで申しますと、「クライシス」をほんとうに「クリティカル・シンキング」するような、真の「危機の教育学」というものを、私は、ほんとうにご参加の皆さんに期待しているわけです。その意味で、私は、この夏、「「危機」の概念をめぐって」という報告をこの同じ場所で、させて頂いたわけですが、今日の「若者支援」についてのコメントも、ある意味で、その応用版と言ってもいいと思っているのです。

（報告終了）